

テモテへの手紙第一「若者が指導者として立つ時」

1A 信仰にある父 1

2A 願い、祈る姿 2

3A 神の家での行動 3

4A 信者の模範 4

5A 家族の養い 5

6A 信仰の勇敢な戦い 6

本文

若者であるということを持って持っている制約と、使命についてセッション1で学びました。そしてセッション2では、私たちが教会の現場において、若者としてどのような心構えでいるべきか、ということについて見ていきたいと思えます。ここに来ているみなさんの多くが、いわゆる「意識高い系」だと思えます。つまり、教会のことについて真面目に取り組んでいる人たちです。

それでテモテへの手紙を読むことは、とても有益でしょう。全体をざっと眺めながら、パウロがテモテに対して発信した命令を受け取って、若い世代がしっかりと神の御心を行なっていくことができる知恵をいただきたいと思えます。テモテへの手紙は、テトスへの手紙、またピレモンへの手紙と並んで、「牧会書簡」と呼ばれます。テモテは、エペソの教会における牧会者であり、かつ次に教師として、牧者として信頼できる人に任せていくことができるように、パウロから任されました。

ここにいる皆さんが、牧者にならないと思えます。けれども、パウロがテモテに行った言葉、「テモテよ。ゆだねられたものを守りなさい。(1テモテ 1:20)」というのは、それぞれの人に与えられている言葉ではないでしょうか？主にあって、福音を柱として守って行かないものがあります。私たちが守るべきは、教会の組織や形態ではなく、福音の実体、実質を、自分の今、生きている状況の中で、しっかりと守っていくということです。福音が福音であるように、キリストが私たちの間に生きておられるように、守らなければいけないものを守っていくのです。そして守っていくときに、神の御霊が、必ずや働いてくださり、次の世代に信仰を引き継ぐことができます。

エペソの教会というのは、初めに、パウロの働きによって、神の偉大な業、奇跡が起こったところでした。パウロの手ぬぐいだけでも悪霊が出て行ったというようなところなんです。けれども、パウロがエルサレムに行こうとしている途上で、エペソにいる長老たちを集め、そこで言ったのは、凶暴な狼があなた方の中に入り込む、そしてあなた方自身からも、いろいろな曲がったことを語って、弟子たちを自分のほうに引き込もうとするものたちが現れると話しました(使徒 20:28-30)。そして、案の定、エペソの教会に仲間の背教と裏切りが始まっていったのです。かなりしんどい仕事を、テ

モチは任されています。それでは読んでみましょう。

1A 信仰にある父 1

1:1 私たちの救い主なる神と私たちの望みなるキリスト・イエスとの命令による、キリスト・イエスの使徒パウロから、1:2 信仰による真実のわが子テモテへ。父なる神と私たちの主なるキリスト・イエスから、恵みとあわれみと平安とがありますように。

パウロがテモテに伝えたかったことは、神が救い主だということです。私たちが罪から救う方であり、望みはイエス・キリストにあるということです。そして次が大事です、「信仰による真実のわが子」とパウロはテモテのことを呼んでいます。若い世代のキリスト者にとって、幸いなことは何かと言いますと、自分が信仰によって父と言うことのできるような人がいるかどうか？であります。いわゆる、自分がキリストに従っていこうとする時に、この人が主に付いて行っているように付いて行きたいと願っているような人です。初めの時に、そのような人、尊敬し、尊敬するだけでなく、付いて行ける人ですね、そういった人に出会えたらすばらしいです。

私にとっては、三人の人がいました。チャック・スミスを間近で見っていました。そしてもう一人、デービッド・ホーキングという牧師もその時、教会のスタッフでした。そして牧会訓練校の校長であるカール・ウェスタランドがいました。チャックが召天した時、私は親でもこんなに泣くのか？と思ったぐらい泣きました。自分が彼を信仰の父のように慕っていたことをその時はじめて分かりました。

そして信仰の歩みは、「恵みとあわれみと平安」であります。パウロはいつも、恵みと平安がありますようにとは言いますが、憐れみを真ん中に入れていきます。神の憐れみがなければ、やっていきません。再びチャックですが、彼が召天する 2013 年の牧者会議に、参加する幸いを得ました。彼のメッセージは、自分がいのちの書から消されることなく、主イエスにお会いできるのは、自分の行ないによる義ではなく、イエス様の義が自分に与えられたからだと言っていました。あのチャックでさえ、いや彼自身が、自分がそのまま天に入ろうとするものなら、地獄に行ってしまうことをよく知っているのでしょう。神の憐れみです。

1:3 私がマケドニアに出発するとき、あなたにお願いしたように、あなたは、エペソにずっととどまっていて、ある人たちが違った教えを説いたり、1:4 果てしない空想話と系図とに心を奪われたりしないように命じてください。そのようなものは、論議を引き起こすだけで、信仰による神の救いのご計画の実現をもたらすものではありません。1:5 この命令は、きよい心と正しい良心と偽りのない信仰とから出て来る愛を、目標としています。

これが、先ほど話した「違った教え」をする人たちです。心を奪われるのではなく、「信仰による神の救いのご計画の実現」のほうに、目を向けていることです。命じてください、と言っていますから、

これは命令です。そしてテモテは、対決しないといけないということです。どうでしょうか、私はもつと若かった時、変なことを言っている人がいるとき、黙っているしかありませんでした。だって、自分がそのような立場にいないことは明らかでしたから。年上の人や、影響力のある人々がいるのを見たら、そのまま黙っているしかありません。けれども、自分が恵みによって立たせられている時に、厳しく命じないといけないことがあります。

そしてパウロは、これらの律法の教師だと自称している者たちが律法のことを分かっていない、律法は正しい者のためではなく、健全な教えに背いている者たちのものだと言っています。これは、彼ら自身のことでしょう。律法をふりかざしながら、実は自分自身が律法を守り行なっていないのです。私たちの福音を潰すのは、「自分たちが正しくなければいけない」とする力です。すべては神の恵みによって立っているのに、もちろん欠けを指摘されたら、私たちはひるんでしまいます。しかし、そもそも救われて、神に用いられているのはどうしてでしょうか？自分たちが罪人であるのに関わらず、神が救い出してくださったからです。

そこでパウロが、自分自身の働きについて述べます。彼の生きざまが、何を守らなければいけないかを如実に表していました。

1:12 私は、私を強くしてくださる私たちの主キリスト・イエスに感謝をささげています。なぜなら、キリストは、私をこの務めに任命して、私を忠実な者と認めてくださったからです。1:13 私は以前は、神をけがす者、迫害する者、暴力をふるう者でした。それでも、信じていないときに知らないでしたことなので、あわれみを受けたのです。1:14 私たちの主の、この恵みは、キリスト・イエスにある信仰と愛とともに、ますます満ちあふれるようになりました。1:15 「キリスト・イエスは、罪人を救うためにこの世に来られた。」ということばは、まことであり、そのまま受け入れるに値するものです。私はその罪人のかしらです。1:16 しかし、そのような私があわれみを受けたのは、イエス・キリストが、今後彼を信じて永遠のいのちを得ようとしている人々の見本にしようと、まず私に対してこの上ない寛容を示してくださったからです。

パウロが話しているのは、罪人を救うキリスト・イエスの働きに対して忠実であることです。そして、ここでパウロが何を引き継がせようとしているのかが書かれています。「そのような私があわれみを受けたのは、イエス・キリストが、今後彼を信じて永遠のいのちを得ようとしている人々の見本にしよう」ということです。自分の正しさを引き継がせるのではなく、神がいかにかこの罪人を救われたのか、その神の恵みを受け継がせるために立っています。そして 18 節を見てください。

1:18 私の子テモテよ。以前あなたについてなされた預言に従って、私はあなたにこの命令をゆだねます。それは、あなたがあの預言によって、信仰と正しい良心を保ち、勇敢に戦い抜くためです。

テモテには大きな課題がありました。それは、その若さのゆえに、人々に対して恐れを抱いていた事です。臆病になっていたことです。そこで、パウロはしっかりと立って、勇敢に信仰の戦いをしなさいと命じています。ここでパウロが奮い立たせている理由というのがあります。「以前あなたについてなされた預言」があるからです。これが、先のセッションでお話した神の召しと、その賜物です。神の召しを知っているかどうか、自分の人生を全うできるかどうかの要です。二つの問題があることを先に話しました。一つは、自分の召しがかかっていないということ。サウルがそうだったので、どんどんおかしくなっていました。もう一つは、召しは分かっているけれども、全うしないこと。ソロモンが、横道にずれていってしまいました。テモテは後者に陥りそうになっています、預言によって語られ、賜物が与えられていたのに、それを用いないでしまっている恐れがありました。

そして最後の二節で、パウロはテモテに、名指しで信仰の破船にあったという人々を挙げています。これは、教会の一般の人々には言えない内容です。パウロが牧者テモテだからこそ、個人的に指導できる内容です。事実、教会において問題が起こる時に、問題を起こしている具体的な人物がいます。聖書には、問題を起こしている人物を名指しにしています。コラの反乱の時、コラの名前が出ていたでしょう？まさに、信仰の戦いです。

2A 願い、祈る姿 2

そしてパウロは2章において、「願って、祈る姿」を教えています。

2:1 そこで、まず初めに、このことを勧めます。すべての人のために、また王とすべての高い地位にある人たちのために願い、祈り、とりなし、感謝がささげられるようにしなさい。2:2 それは、私たちが敬虔に、また、威厳をもって、平安で静かな一生を過ごすためです。2:3 そうすることは、私たちの救い主である神の御前において良いことであり、喜ばれることなのです。2:4 神は、すべての人が救われて、真理を知るようになるのを望んでおられます。

すべての人が救われることを神が願っておられます。そのためにまずしなければいけないこととして、「すべての人のために、また王とすべての高い地位にある人たちのために願い、祈り、とりなし、感謝がささげられるようにしなさい。」ということです。当時、ユダヤ人はローマに対する反感に満ちていました。イエス様が地上におられた時、ローマに対して納税をするのは御心にかなっているかどうか、詰問を受けられたほどです。事実、彼らは虐げられていたのです。そして、66年、ユダヤ人反乱が起こります。熱心党が主導しました。しかしパウロ、またキリスト者たちは、全く別の道を選びます。全ての人々が救われることを神は願っておられるのですから、まずそういった人々に、感謝し、願い、執り成しができるようにしていないといけないのだということです。

教会には、あらゆる人々が来ます。神があらゆる人々を受け入れ、救おうとしておられるのですから当然です。けれども、もしキリスト者が、反ローマの立場を取ったらどうなるのでしょうか？そ

れだけで、教会がローマ社会に生きる全ての人に届かない存在になります。その時点で、世の一部になってしまっています。しかしイエス様は、ローマ総督ピラトに対して、「わたしの国はこの世のものではありません。(ヨハネ 18:36)」と言われました。キリストの福音ではないもので、人々を一つにするかもしれませんが、他の人々を排除していくようになり、福音宣教をする主体として成り立たなくなります。

一つ例として天皇陛下を挙げてみましょう。彼が生前退位を発表した時に、「国民のための祈り」というような言葉を使いました。天皇は、神道ですが祭司としての位置付けがあります。ゆえに天皇が政治的になってはいけないことが規定されています。もしどこかに付けば、それに合わぬ人が必ず出て来るからです。全ての国民のための祈りを捧げるためには、そういった政治を超えた国民の統合の象徴的存在であり続けなければならないわけです。ましてや、なのです。地上の祭司でさえ、祈りと願いを捧げることを最優先しているのであるから、ましてや、キリスト者は、神に対して祭司となり王となったとペテロ第一に書いてあります。

そして自分が福音宣教者なのだということを、5 節から 7 節で述べて、それから 8 節以降は、教会の中における秩序、特に男と女のそれぞれにある務めについて話します。男が祈るように、と言っています。男は、争いや怒りのほうに偏りがちです。そうではなく、祈りの手を挙げるのです。そして女は、身の飾りに偏りがちです。そうではなく、良い行ないによって、よく従うことによって身の飾りとしなさいと言っています。男でいうならば、すでに教会で論争して、議論を引き起こして、かき乱している者たちがいたのですが、祈りが足りなくなっています。女は、支配しようとするときに、そこに惑わしが来ることが警告されています。このこともまた、福音の働きの中で重要な秩序となっていきます。

3A 神の家での行動 3

続けて、教会における指導者の資格についてパウロは、テモテに話しています。監督の資格と執事の資格ですが、ここで大事なのは 15 節です。「神の家でどのように行動すべきかを、あなたが知っておくためです。」と言っています。神の家としてどのように行動すべきか、監督がすべきこと、執事がすべきことを書いています。

監督の資格をよく読めば、また執事もそうですが、「神の家が、いかに社会的にも証しを立てていなければいけないか」を示しています。監督が威厳を持ち、慎み深く、品位があって、それで自分の家を十分に治めている人とあります。同じに、執事も謹厳であるべきだとあります。執事は監督と他の人々との板挟みになりやすいですから、二枚舌になってはいけない、また悪口を言わない、自分を制することができる人、と言っています。

ここまで読んでいかがでしょうか、テモテに対するパウロの命令は、ダビデにも通じることであり、

ヨセフにも通じることであります。つまり、置かれている状況の中で、それでも祈ることのできる姿勢、慎み深さがありますね。ダビデが決してサウルに復讐しなかったこと、主が裁いてくださることを堅く信じていました。ヨセフは、どこにおいても忠実でした。たとえ牢屋の中でも忠実です。そこで、何か秩序を乱すようなことは当然していません。もっと大事な使命があったからです。このような安定を見つけるのは、実は難しいです。どこかに逸れて行ってしまい、右や左に揺れていってしまうからです。けれども、安定の中に福音が進んでいきます。神の国が広がっていきます。

それでパウロは改めて、その安定とバランスは、真理によってもたらされることを 15 節で話しています。神の家は、土台だけでなく柱もあり、それが神が肉を取られたキリストと、その働きなのだということを 16 節で話しています。

4A 信者の模範 4

そしてパウロは、次に「違った教え」について再び触れていきます。結婚することを禁じたり、食物を絶つことを教える、こういった教えは「惑わす霊と悪霊の教え」であると言っています(1 節)。そして何が大切かという、神のことばと祈りだと言っています。人はとかく、肉体に関すること、形がこうであるべきだというものに囚われていきます。真面目な人ほど、そういった形を求めます。けれども、もっとも大事なものは、しっかりとした教えと祈りなのだということです。6 節をご覧ください。

4:6 これらのことを兄弟たちに教えるなら、あなたはキリスト・イエスのりっぱな奉仕者になります。信仰のことばと、あなたが従って来た良い教えのことばとによって養われているからです。

テモテは、母親また祖母が聖書を教えてくれました。その教えがしっかりと、自分の信仰の良心に入っています。彼の問題は、そこに自身がなかったのです。それで、彼が奮い立って、しっかりとそれを教えていくように励ましているのです。いかがでしょうか、若いということで、自分が教わったことをそのまま語ることに恐れを感じることはないでしょうか？自分がどれほど養われているか、分かっているけれども、それを教える勇氣はあるでしょうか？自身を持ちなさいとパウロは言っているのです。

そして 7-11 節において、再び肉体よりも霊のほうを大事にしないと教えています。肉体の鍛錬や、食物とか結婚とか、そういったものに拘って、やっていけない、やっていいとかではなく、すべてのものを、単純に主によって与えられたものとして感謝し、受けとめていけばよいのです。そして、はっきりと若者としてのテモテに、パウロが命令します。

4:12 年が若いからといって、だれにも軽く見られないようにしなさい。かえって、ことばにも、態度にも、愛にも、信仰にも、純潔にも信者の模範になりなさい。

この「若い」ということについて、注解書を読むと、40歳まで至っていないということではないか、という意見が多いです。30歳ぐらいだったのかもしれない、そしてパウロは70歳ぐらいだったであろうか、という意見もありました。

年が若いということでの不利益は、実はどの文化にもあります。私個人は、今のほうがはるかに20代の時より生き生きと主の働きができています。まず、何をしているのか分からなかったという思いがありましたが、「あなたはまだ若いから」という理由で、教えるべきこと、指導すべきことを聞き入れてもらえない、ということです。ある若い奉仕者と話したことがあります。彼はそのことをよくわきまえていて、「これは、どうしようもないことだ」と言っていました。若いということだけで軽んじられるということです。しかしテモテにとっては、それが不利益でした。エペソにある教会には、もっと年上の人々がたくさんいたのでしょう。そして違った教えをしている者たちを戒めても、そこで「あなた、若いねえ」ということを言われてしまっていたかもしれません。

そこで、パウロは基本的に、「問題や挑発に惑わされるのではなく、一途に専念したほうがよい。」ということでもあります。それが、「信者の模範になりなさい」という勧めです。「ことばにも、態度にも、愛にも、信仰にも、純潔にも信者の模範になりなさい。」と言っています。指導者として、どのようにキリストに従っていけばよいのか、それを示していくことによって付いて来てもらう、ということです。そして、牧者は公の場で最も目立つのが「ことば」です。多くの言葉を語るの、言葉において何を語ればよいのか、それを示していくことができます。そして、「態度」とあります。これは「行動」とも訳せる言葉です。自分の行ない、またそこに現れている姿勢と言ってよいでしょう。そして残りの三つは、心の中にあることで動機です。「愛」があります。動機と言えども、それは人に伝わるものです。同じ言葉を話していても、その人が愛しているのか、そうでないかは、どんなに話す技法を身に付けていても自ずと分かります。それから、「信仰」ですね。その人の生活から何を信じているのかが分かります。そして、「純潔」です。テモテに対して、第二の手紙で情欲を避けなさいという勧めをします。性的な純潔、また思いにおける純潔、情欲のみならず、悪意などによる汚れからも離れていること、こうしたことは先ほど話したように、霊的な鍛錬が必要です。

4:13 私が行くまで、聖書の朗読と勧めと教えとに専念しなさい。4:14 長老たちによる按手を受けたとき、預言によって与えられた、あなたのうちにある聖霊の賜物を軽んじてはいけません。4:15 これらの務めに心を砕き、しっかりやりなさい。そうすれば、あなたの進歩はすべての人に明らかになるでしょう。4:16 自分自身にも、教える事にも、よく気をつけなさい。あくまでそれを続けなさい。そうすれば、自分自身をも、またあなたの教えを聞く人たちをも救うことになります。

これまで何度も行ってきたことですね、按手を受けた時に預言によって与えられた、聖霊の賜物があります。それは、聖書を教えることに関わることです。それをしっかりと行ないなさいと言っています。召されたところ、賜物が与えられたところに留まっているのです。それをしっかりと行なっ

ていくこと、忠実にやっていたら、若者だと言われて軽んじられていても、必ずその進歩は明らかにされるということです。初めは認められなくとも、必ず明らかにされます。そして、気を付けることとして、まずは自分自身です。そして教えることです。そのようにして、神の救いが自分にも、聞いている人にも明らかにされていきます。

5A 家族の養い 5

5章は、教会の中においてどのようにふるまっていけばよいのか、具体的な助言を与えています。

5:1 年寄りをしかってはいけません。むしろ、父親に対するように勧めなさい。若い人たちには兄弟に対するように、5:2 年とった婦人たちには母親に対するように、若い女たちには真に混じりけない心で姉妹に対するように勧めなさい。

牧者であるので、その務めにおいて肉の家族における自然の関係のことを忘れてはいけないことを教えています。年寄りが信者であるとき、彼は羊でありながら、けれども年寄りであり、父のような敬いが必要なのだということです。そして同じ同年代か自分より年下の人は見下しがちですが、兄弟に対するような結びつきがあって、大切にしなさいということです。同じように婦人には母親に対するように、若い女たちに対して、家族の姉妹であれば情欲を抱きませんね。同じように接しなさいということです。いかに、神の家族が家族であるのかを教えてください。

そして3節以降は、やもめについての教えです。ここにおいても、肉の家族のことを忘れてはいけないことを教えています。肉の家族と神の家族の関わり合いを教えています。教会においては、単なる福祉制度ではない、霊的な奉仕があります。その人がしっかりと、祈りを捧げ、旅人をもてなすなど良い行いをしてきたかどうか、つまり教会に仕えてきたかどうかで審査されます。そして、肉の家族で扶養することができるなら、しなければいけません。霊的に奉仕できる人に対する報いとして、やもめを教会が養い、そうでない人たちとの区別をしっかりとつけたいといけません。

多くの人が、何でも平等にしようとしています。ここではやもめだから、優しくしないといけない、助けないといけないと思ってしまう。けれども、この霊的事項の優先順位を誤ると、教会に負担になるばかりか、その人をだめにしてしまうし、また肉の家族が養うという機会も奪ってしまいます。

そして指導者に対する敬いについて書いていますが、17節ですね。二重に尊敬しなさいとありますが、これは物質的にも支えなさいということです。けれども、指導者は他の人たち以上に重い責任があります。罪も、公然と人の前で責められることとなります。だから、その按手は厳正に行わないといけないということです。

ここで、「5:23 これからは水ばかり飲まないで、胃のために、また、たびたび起こる病気のため

にも、少量のぶどう酒を用いなさい。」とパウロが言っています。これでお酒についての問題をとりあげるのですが、いささか文脈が外れています。ここでは、テモテがいろいろな問題に対処しなければいけないから、そして重責によって、胃痛を起こしているか何かをしていると考えられるからです。それで、滋養のため少量のぶどう酒を飲みなさいと勧めています。それで、自分自身で裁かなくとも大丈夫だよ、と励ましています。

5:24 ある人たちの罪は、それがさばきを受ける前から、だれの目にも明らかですが、ある人たちの罪は、あとで明らかになります。5:25 同じように、良い行ないは、だれの目にも明らかですが、そうでないばあいでも、いつまでも隠れたままでいることはありません。

これは、「分からないこと、理解ができないことが起こる」とセッション1で話したことにつながりません。すべてのことが明らかにされている訳ではない時に、必ず明らかにされるのだと信じてことができます。

6A 信仰の勇敢な戦い 6

そして、その中で満ち足りた心を持つことが大事になります。6章では、再び違った教えをする者たちについて警告しています。その前に、奴隷が主人に仕えるように教えています。ここでも、やはり秩序を重んじる姿勢を教えていますね。そして3節です。

6:3 違ったことを教え、私たちの主イエス・キリストの健全なことばと敬虔にかなう教えとに同意しない人がいるなら、6:4 その人は高慢になっており、何一つ悟らず、疑いをかけたり、ことばの争いをしたりする病気にかかっているのです。そこから、ねたみ、争い、そしり、悪意の疑りが生じ、6:5 また、知性が腐ってしまって真理を失った人々、すなわち敬虔を利得の手段と考えている人たちの間には、絶え間のない紛争が生じるのです。6:6 しかし、満ち足りる心を伴う敬虔こそ、大きな利益を受ける道です。

敬虔を利得の手段と考えている、とあります。教会の奉仕で、金銭的な利益を得ようとする者たちがいたということです。けれども、金銭に目がくらんだものは、非常な苦痛をもって自分を刺し通すのだと警告しています。そして11節です。信仰の戦いを勇敢に戦いなさいと命じています。

6:11 しかし、神の人よ。あなたは、これらのことを避け、正しさ、敬虔、信仰、愛、忍耐、柔和を熱心に求めなさい。6:12 信仰の戦いを勇敢に戦い、永遠のいのちを獲得しなさい。あなたはこのために召され、また、多くの証人たちの前でりっぱな告白をしました。6:13 私は、すべてのものへのいのちを与える神と、ポンテオ・ピラトに対してすばらしい告白をもってあかしされたキリスト・イエスとの御前で、あなたに命じます。

目標があり、そこから逸れることなく、しっかり証しと告白をしていきなさいということです。

6:14 私たちの主イエス・キリストの現われの時まで、あなたは命令を守り、傷のない、非難される
ところのない者でありなさい。6:15 その現われを、神はご自分の良しとする時に示してくださいま
す。神は祝福に満ちた唯一の主権者、王の王、主の主、6:16 ただひとり死のない方であり、近づ
くこともできない光の中に住まれ、人間がだれひとり見たことのない、また見ることもできない方
です。誉れと、とこしえの主権は神のものです。アーメン。

こうやって、主の再臨の時を待ち望みなさいということです。私たちの焦点が、キリストの現れの
時になっているかを思い計らないといけないのですね。そして 17 節以降に再び、富に希望を行な
いように戒めています。私たちはイエス様の再臨よりも、どうしても仕事のほうに、お金が入ること
の方に目が向かってしまいます。しかし、まことのいのちのための良い基礎をきずきなさいと勧め
ています(19 節)。

そして結論付けているのです、「テモテよ。ゆだねられたものを守りなさい。」